

9月15日～17日

ホームステイ	
訪問先都市	始興市
面会者	始興市長 各ホストファミリー（15組）
プログラム概要	始興市でホームステイ歓迎会が行われ、団員たちは2名ずつに分かれ二泊三日のホームステイを行った。ホストファミリーの案内のもと、地元の名勝に訪れたり、キムパブ（韓国風のり巻き）やトッポッキなどの韓国料理と一緒に作ったりと様々な経験ができた。短期間であったがホストファミリーと団員の絆は深まり、最終日のお別れの際にはどの家族も名残惜しそうに再会を誓い合った。

9月18日

蔚山外国語高校	
訪問先都市	蔚山市
面会者	校長
訪問概要	蔚山外国語高校は、蔚山唯一の外国語高校で、国際交流も積極的に行っている。ここでは施設見学の後、歓迎式で校長挨拶及び団長挨拶に続き、生徒と派遣団員による両国文化紹介を行った。生徒による完成度の高い日本語での文化紹介やパフォーマンスに、派遣団からは歓声が上がった。その後、小グループに分かれ、日韓の教育状況をテーマにディスカッションを行った。ディスカッションでは、現役の高校生の意見を聞くことで韓国の教育の現状について改めて考えさせられた。

9月19日

蔚山家庭型Weeセンター	
訪問先都市	蔚山市
面会者	校長 事務所長
訪問概要	蔚山家庭型Weeセンターは、家庭や学校レベルでは指導・改善が難しい青少年を総合支援する寄宿型センターである。今回の訪問では概要説明の後、生徒の代表が日本語で挨拶をし、その熱烈的な歓迎の言葉に感銘を受けた。その後、日本派遣団からの文化紹介を全団員が生徒へ伝えればと願いながら一生懸命行った。最後に生徒たちと一緒にゴム靴作り体験をし、親睦を深めた。

蔚山青年創業センター

訪問先都市	蔚山市
面会者	チーム長／センター長
訪問概要	蔚山青年創業センターは、蔚山で青年の創業を支援する機関である。ここでは事業紹介の後、実際に創業した3名の青年CEOのお話を伺い、創業家たちが運営しているオフライン店舗を見学した。創業者の少ない蔚山で地域性をいかした事業を始めようという青年の熱意を支える当機関を訪問し、地域活性化における青年の存在の重要性に気づかされた。

9月20日

海東龍宮寺	
訪問先都市	釜山市
訪問概要	海東龍宮寺は、1376年（高麗時代）に建てられたとされる、韓国で最も海に近い寺である。海水観音大仏が有名であり、観音信仰の聖地として多くの参拝客や観光客が訪れている。ここでは、境内を自由に散策し、一面に広がる海と歴史的な建造物の美しいコントラストに感動した。また、願いが必ず叶うと言われる大仏があり、団員は各々の願いを託していた。

冬栢公園灯台・スリマルAPECハウス

訪問先都市	釜山市
訪問概要	冬栢公園灯台とスリマルAPECハウスは、海雲台ビーチの西端に位置する公園にある。スリマルAPECハウスは、2005年11月に開催されたAPEC首脳会議の会議場として建設され、APEC会議後は国際的な会議場として使用されている。ここでは、日本語のガイドのもと施設を見学した。国際協力に関する歴史的な会合が開かれた場所を眼前にし、私達も今後の国際社会を担う人材として決意を固めた。

国立海洋博物館

訪問先都市	釜山市
訪問概要	国立海洋博物館は、2012年に開館した韓国初の国立海洋博物館である。海の歴史、科学、産業など海に関係する国内外の遺物や展示物の他、水族館も併設されている。ここでは日本語のガイドのもと館内を見学した。丁寧な解説をいただき、朝鮮通信使や船、南極探査など海洋にまつわる展示を鑑賞し、韓国の海洋技術の発展を感じた。

9月21日

伝統文化体験“楽knock東萊民族体験”

訪問先都市	釜山市
プログラム概要	“楽knock”はナックナック＝門をたたく、という意味の言葉で、釜山東萊地域無形文化財の保存と活性化のために、釜山民族イエス保存協会が運営しているプログラムである。伝統文化体験では、東萊閑良舞を鑑賞した後、衣装を身につけ東萊鶴の舞の体験及び伝統楽器の演奏体験を行った。昼食の際には、パジョン（ネギチヂミ）の調理工程を見学した。その後、東萊府東軒を訪れ、朝鮮時代の裁判の様子を再現した公演を鑑賞し、衣装体験をした。日常では触れることができない韓国の歴史ある伝統文化を実際に体験し、肌で感じることができた。

9月22日

MBC WORLD	
訪問先都市	ソウル市
訪問概要	MBC WORLDは、韓国の三大テレビ局の一つである、MBCの人気番組を体験できる観光スポットである。団員は、ホログラムコンサート観覧や、画面に現れるアイドルとのダンス体験、ドラマの世界に入り込んだようなトリックアートの写真撮影等を楽しんだ。韓国のデジタル技術の発展や観光客を楽しませる様々なアイデアに驚かされた。

希望製作所	
訪問先都市	ソウル市
面会者	ソーシャルデザイナー
訪問概要	希望製作所は、市民社会参加民間機構として様々な社会問題について市民たちが共に悩み、解決方法を模索する場所である。今回の訪問では、機構や事業について説明いただき、「明日想像プロジェクト」という、地方の青少年の進路や将来に関しての悩みを解決するためのプログラムの説明いただいた。特に地方の青少年たちのためのプロジェクトや世代間格差を無くすためのプロジェクトの運営のお話を伺った。その後、質疑応答を行い、韓国における市民活動についての理解を深めた。

9月22日～24日

日韓青少年交流会	
訪問先都市	ソウル市
面会者	韓国青少年活動振興院事務処長 韓国青少年活動振興院課長 平成29年度日本派遣団団長 平成29年度日本派遣団副団長 平成29年度日本派遣団副団長
プログラム概要	団員が心待ちにしていた二泊三日の日韓青少年交流会が行われた。初日のレクリエーションや夕食を通し、緊張していた団員もすぐに打ち解け合うことができた。2日目の多文化共生をテーマにしたディスカッションでは、韓国青年と意見を交わすことで、両国の共通点及び相違点などについて相互理解を深めた。また、両国青年が文化紹介発表を行った夜の文化交流会や3日目の共同活動を通して、日韓青年は一層絆を深めることができた。

9月24日

ダンドン青少年文化の家	
訪問先都市	軍浦市
面会者	館長
訪問概要	ダンドン青少年文化の家は、青少年の文化活動を支援する施設である。今回の訪問では、施設概要や取り組みについての説明に続き、団員による文化紹介発表を行い、会場は多いに盛り上がった。その後、青少年と共にグループに分かれ、陶磁器作製やチヂミ・餡作りを体験した。短い時間ではあったが青少年と和やかな雰囲気度過ごす事ができ、交流を深めることができた。

9月25日

サムスンイノベーションミュージアム	
訪問先都市	水原市
訪問概要	サムスンイノベーションミュージアムは、韓国最大の電子産業史博物館である。日本語での解説のもと施設見学を行った。様々な媒体（映像・タッチパネルなど）を用いた最新技術の体験や、電子産業の歴史に関する貴重な展示物に、先端技術が日々進歩していることを改めて感じた。すばらしい技術の発展に驚かされ、近い将来実現するであろう技術革新へ期待を膨らませた。

水原華城・華城行宮	
訪問先都市	水原市
訪問概要	水原華城にある華城行宮は、韓国最大の行宮（朝鮮時代の王が地方に訪問する際に利用された宿泊・休養施設）である。現在では、ドラマなどの撮影場所としても知られている。ここでは、日本語で施設についての説明を聞いた後、各自、自由に見学した。広大な歴史的建造物を間近にし、朝鮮王朝時代に思いを馳せた。

韓国民俗村	
訪問先都市	龍仁市
訪問概要	韓国民俗村は、約30万坪の広大な敷地に、朝鮮時代後期の階層別文化や生活様式がそのまま再現された野外博物館である。ここでは日本語の解説のもと、各地方の実物家屋を移築・復元して作られた朝鮮時代の村を見学した。団員は、タイムスリップしたかの様な空間で記念撮影を楽しんだ他、文化体験も行い、朝鮮時代の庶民や貴族の生活様式について理解を深めた。

9月26日

韓国青年とのソウルシティツアー	
訪問先都市	ソウル市
プログラム概要	日韓青少年交流会で出会った韓国青年と共に3、4名のグループに分かれソウル周辺を見学した。実際に韓国に暮らす韓国青年ならではの視点でプランを作ってくれ、韓国の人々の日常を知ることができた。韓国青年との交流も深まり有意義な時間となった。

団長報告

◆はじめに

日本・韓国青年親善交流事業は、昭和59年の日韓両国首脳会談における共同声明の趣旨と、昭和60年の日韓両国交正常化20周年を踏まえ、昭和62年度から日本と韓国両国政府が共同して実施しているもので、今回の派遣団は31回目のものであった。

7月に国立オリンピック記念青少年総合センターで行われた事前研修において、初めて派遣団構成メンバー候補が顔を合わせたのが、初日に係の分担を決め、その後、みんなで知恵を出し合って決めた団のスローガンを「**하나**になろう〜咲かせ！日韓の笑顔〜」とした。韓国語で**하나**というのは「ひとつ」という意味があり、我々韓国派遣団がこれから交流する韓国青年、そして日本と韓国がひとつになれるような架け橋になることができれば、そして、人と人との交流が積み重なって、大輪の花を咲かせることができればといった二つの意味がこもったスローガンである。このスローガンとロゴマークが決まってから、韓国派遣に対する責任感や団の結束力といったものが一層高まったように感じられた。



◆韓国派遣まで

前述のとおり事前研修で初めて団のメンバーが顔を合わせたのが、年齢や職業、韓国に対する認識や語学力、個性等様々な団員たちをこのような事業に携わるのが初め

での私が団長という大役を果たして務めることができるのか、大変不安であったが、内閣府の担当である水野専門官や本事業受託事業者である青少年国際交流推進センターの職員であり、昨年度渉外で本事業に参加された川嶋さんを始め、国際交流経験豊富な両副団長や両渉外に引っ張っていただき、また、過去の団長経験者からも事前にアドバイスをいただいたこともあり、無事に研修最終日に結団式を行い、25人全員に参加決定書を交付し、4泊5日の事前研修を終えることができた。

しかし、ここで係やそれぞれの役割について決めたのだが、これからの自主研修期間を始め韓国派遣中や帰国後まで、この係ごとの集団で動いていくことが多くなったこともあり、他の係とのつながりが少し薄くなってしまった感はあるものの、もっと団員全員が一人一人と話す機会を設けることができれば、個々の考え方や個性等もある程度理解することができて、団の結束力もより一層高めることができたのではないかと感じたので、これは今後の課題として検討する必要があると思った。

◆日韓青年親善交流のつどい

昨年度に引き続き、日本青年の派遣に先立って韓国青年の招へいが7月から8月にかけて行われたが、そのプログラムの中でも大きなイベントの一つである「日韓青年親善交流のつどい」が埼玉県越谷市の研修施設で2泊3日の日程で行われ、私も全日程参加させていただき、今回の団員も6名が参加した。実行委員会を中心に過去の参加団員も多数参加して行われた「つどい」であるが、アイスブレイクや日韓両国青年によるパフォーマンス、テーマ別ディスカッション、文化体験、ミニ運動会など、多様なプログラムが行われた中で、日韓の青年たちがお互い協力しあいながら楽しく進行していく様子を直接拝見することができたのは、大きな収穫であった。特に、韓国青年のパフォーマンスのレベルが高く、参加した団員たちは、これから自主研修期間中に相当練習しなければならないのではと危機感を持ったのではないかと感じた。また、「つどい」の前々日に開催された内閣府主催

歓迎会において、韓国青年団の団長、両副団長を始め、韓国青年たちとも話をさせていただいたのだが、この「つどい」では、より深く話をする機会に恵まれ、また、昨年度韓国派遣団の団長や渉外も参加されていたので、昨年度の話も聞くことができ、様々な情報を得ることができたことは、これから韓国に派遣される自分自身にとって非常に効果が大きく、参加してよかったと思ったので、団長も話されていたが次回派遣される団長を始め団員についても、可能な限り参加されることをお勧めするとともに、「つどい」に参加することが難しい地方の団員においては、今回の団員も何人か参加したが、近くで地方プログラムが開催される場合にはそこに参加してコミュニケーションを築くのもいいのではないかと思う。

◆韓国派遣

7月に行われた事前研修から約2か月間、自主研修期間ということで全国各地に点在している団員たちはそれぞれ担当する係の準備を始め、ディスカッションの勉強、日本文化紹介の練習など、顔が見えない仲間たちと連絡を取り合いながら準備を重ねてきた。出発前研修で久しぶりに全員と顔を合わせたときはとてもうれしくほっとしたのと同時に、無事に韓国派遣で成果を挙げることができるよう、みんなを導いていかなければならないといった使命感や責任感といったものも感じずにはいられなかった。そしていよいよ韓国に向けて旅立つことになるが、北朝鮮との関係において、朝鮮半島情勢は予断を許さない状況にあり、また、私自身初めての韓国訪問ということもあり、緊張状態での入国であったが、仁川国際空港で団員たちとほぼ同世代のコーディネーターや通訳の方々には笑顔であたたかい歓迎をしていただいたことで、安心すると同時に少し落ち着いた気分になった。

◆施設訪問

まず、今回の訪韓中におけるプログラムでは、朝鮮半島情勢を勘案し、例年訪問している南北国境線に近いところには訪問せず、蔚山や釜山といった比較的安全と考えられる地域を選定していただき、日韓両国政府に対し深く感謝を申し上げたい。そして、女性家族部訪問に始まり、日本語を専攻する大学生や高校生を始め、家庭や学内に問題を抱える青少年との交流や青年起業家からの事業紹介など、多種多様な施設を訪問させていただいた。中でも、韓国外国語大学校日本語大学融合日本地域学部長で日本研究所長である李相薫教授の講義は大変興味深いものであり、特に、東日本大震災後の復興交流活

動を例に、「一人の人間としてできることをする」「勉強し、行動する」という言葉が大変印象に残った。また、蔚山外国語高校を訪問した際も熱烈な歓迎を受け、生徒たちの日本語による文化紹介は完成度も高く、我々のために勉強で忙しい中一生懸命練習してきたのではない、さらに、日本人から直接日本語や日本文化について吸収しようという積極的かつひたむきな彼らの姿勢に感動すら覚えた。団員たちも年下の彼らから学んだことも多かったのではないかと思った。



その他、大韓民国歴史博物館や楽knock東萊民族体験、MBC WORLD、希望製作所、ダンドン青少年文化の家、サムスンノベーションミュージアムなどを訪問し、様々な体験などをさせていただいたが、大韓民国歴史博物館では、ガイドさんの日本語による解説で韓国の近現代史について我々日本人の歴史観に相当配慮しながら分かりやすく説明していただいた点が非常に好感を覚えた。また、楽knock東萊民族体験や韓服体験においては、韓国の伝統的民族衣装を着用する機会があったが、衣装を直接身に着けることで、韓国という国を身近に肌で感じることはできたのではないだろうか。

◆ホームステイ

団員たちが楽しみにしていたプログラムの一つが一般家庭で寝食を共にすることで、訪問国の生活が体験できるこのホームステイである。今回は昨年度同様、始興市で2泊3日の日程で全体プログラムの3日目という早い時期に行われた。ホームステイに先立って行われた歓迎式で初めてホストファミリーと顔合わせしたのだが、みんな、どういった方のご家庭にお世話になるのか、期待と不安が入り混じった中でのご対面となったと思うが、歓迎式後に会場で行われていた体験活動（お祭り）に参加

して、多少緊張も和らいだのではないかと。その後、私も含め30人全員がペアを組んで15組がそれぞれのホームステイ先に向かった。私はホームステイを体験するのが初めてであり、韓国語も話せないことから非常に不安であったが、幸いホストファザーが多少日本語を使用できること、娘さんの一人が英語に精通しており、私とペアを組んだ副団長が英語ができたおかげで、英語で意思疎通できたのはとても助かった。そして何より、父、母、年頃の娘2人、息子1人の5人の家族構成であるホストファミリーが年配のおやじ2人を家族同然に受け入れてくれたのが大変うれしかった。この家庭は、日本のみならず、世界各国から多くのホームステイを受け入れているという。家族みんな仲が良く、3人のお子さんも立派に成長し、とてもうらやましく思った。今回のホーム

ステイでは私自身を含め、団員たちはこの異国での生活や文化に直接触れることで大変貴重な経験ができたのではないかと思った。お別れの際には涙を流して別れを惜しむ団員もあり、我々日本人を本当にあたたかく迎え入れてくれた始興市やホストファミリーを始め、関係者の皆様には心より感謝を申し上げたい。



ホームステイ歓迎式

◆日韓青少年交流会

日本における「つどい」に相当するのが、この日韓青少年交流会である。交流を通じてお互いを理解し合い友情を深めることができる極めて重要なプログラムであり、この交流会に向けて団員たちはこれまでディスカッションの勉強や日本文化紹介の練習などに励んできたといっても過言ではあるまい。昨年度は1泊2日というタイトなスケジュールであったと聞けるが、今回は日本同様、2泊3日で行われたのは良かったと思う。交流会には先に日本に派遣された韓国青年も多く参加していることから既に顔見知りの者もあり、再会を喜び合いながら終始和

やかな雰囲気が進められた。初日のレクリエーションから始まり、2日目はテーマ別のグループに分かれての討論会、文化交流の夜、夜の交流会が行われ、最終日は思い出になる写真を撮って文字を作る共同体活動が行われた。文化交流の夜の場において団員たちは日本文化紹介を披露したのだが、これまで練習してきた成果を挙げることができるか団員たちも多少不安があったかもしれないが、最高のパフォーマンスを繰り広げることができ、出席された皆様が大変喜んでくれたのではないかと周りを見て感じる事ができた。成功裏に終わった交流会だが、その陰には、「つどい」の実行委員に相当する、推進運営団（メンター）の地道な努力を忘れてはならない。両国の既参加青年が中心のメンターの皆様には、ありがとう、감사합니다（カムサハムニダ）という言葉だけでは言い表すことのできないくらい感謝の気持ちでいっぱいである。



日韓青少年交流会討論会オリエンテーション

◆最後に

9月27日、15日間に及んだ韓国派遣プログラムを終え、無事日本に帰ってきたが、安堵する余裕もないまま、国際青年交流会議の懇談会に出席し、私とユースリーダーが団を代表して皇太子殿下に御挨拶を申し上げ、御歓談する貴重な機会を賜った。そして、帰国後研修を終え、団員25人全員に参加証を授与できたことは大変うれしく思った。しかし、15日間の日程の中ごろ差し掛かると、日本代表として韓国に派遣されているといった誇りや自覚が足りないのではないかとといった状況も見受けられたことから、急遽団員を集めて振り返りの時間を設けたこともあった。その後は訪問先での質疑応答にも積極的な姿勢で臨むようになるなど変化がみられ、そういった様々な経験を踏まえ成長していく姿が参加証授与式での団長挨拶の途中で脳裏によみがえり、思わず言葉が詰まりそうになった。

我々派遣団は、参加証の授与をもって解散となるが、団員のみんなはこれで終わりではなく、新たにスタートしたという認識をもっていただきたい。そして今後は、これまでの貴重な経験を活かし、これまで多くの先輩たちによって築かれてきた日韓友好の絆をさらに強固なものにしていくとともに、未来に受け継いでいけるよう、事後活動などを通じて引き続き取り組んでいくとともに、今回の事業で知り合うことのできた多くの仲間たちと友好な関係を続けてもらいたいと思うし、今後も国際社会を始め各分野において指導性を発揮できる青年リーダーとして成長することを願わずにいられない。

また、今回私はこの年になって初めて韓国を訪問したが、今まで抱いていた韓国という国や韓国人に対する考えが少しだけ変わったと思う。百聞は一見にしかずというが、まさにそのとおりだと思う。同感してくれる団員もいるかと思っているが、今回の経験を友人だけでなく、私とほぼ同年代のお父さんやお母さんを始め、それ以上の年代の方にもぜひお話ししていただきたいと思う。しかし、日韓両国の間には、その歴史認識の違いなどから様々な問題を抱えていることも事実である。今回の経験を機に、様々な角度から韓国という国を見つめ、理解するとともに、日本という国についてもあらためて認識を深めてもらいたいと思う。

最後に、今回我々の派遣に際しご尽力いただいた日韓両国政府を始め、日本の青少年国際交流推進センター、韓国青少年交流センターの職員の皆様はか多くの関係者の皆様、そして、15日間の長期間にわたって我々に同行してくれたコーディネーターと通訳の3人、本当にお世話になり、団を代表し厚く感謝を申し上げ、私の報告とさせていただきます。



参加証授与式終了後